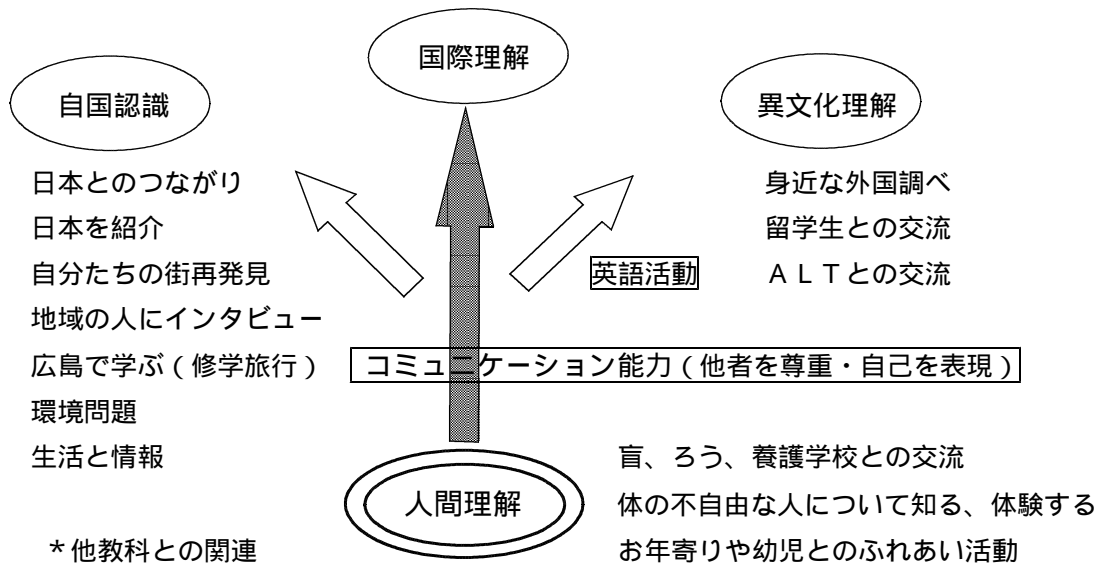


1 様々な角度から楽しむ国際理解教育の推進

【概要】 < 国際理解教育のとらえ方と研修の方針 >



研修の記録を残しながら、伝統ある研修の成果を継承する

長年にわたって同じテーマの研修に取り組む場合は、これまでの研修の成果や課題をどのように生かしていくかが大切となる。研修の方向性については、国際理解教育に関する取組を例にとると、児童の実状の変化、学力や人権といった時代の要請による様々な課題と結び付いて研修の方向を変えることが多い。

そういった多少の方向性の変更はあるものの、「よいものを残し追究する」と同時に「課題への新たな挑戦」を進めることは、大切である。記録を残すことで、伝統ある研修の成果を継承することができるとともに、何が課題なのかを明確にし、課題の克服もできる。長年取り組んできた研修であるからこそ、様々な角度から研修が深められ、楽しめるようにしたい。

国際理解教育は、人間理解を根底とするという考えで進める

これからの時代を生きる人として求められるも

のは、異なる価値観をもった人を受け入れ、共存していこうとすることであると考え、人間理解ありきという考え方に立って国際理解教育をとらえることが大切である。様々なとらえ方ができる国際理解教育ではあるが、これまでの取組の成果から、以下のように考えて取り組む。

- ・ 自国認識を大げさにとらず、身近な問題から進める。
- ・ 外国調べや、外国の人との交流だけに終わらない異文化理解を進める。
- ・ 「分かってほしい」「伝えたい」という思いに立ったコミュニケーション能力の育成を図る。
- ・ 小学校における英語活動は、国際理解を深めるコミュニケーションのための一つと考える。

研修を円滑に進めるためには、環境を整備し備品等を充実させることが大切である

1 初めての研修にかかわる人が参考となる資料
これまでの研修の成果やまとめをいつでも閲覧できるように工夫して、初めて着任した教員が研修への理解を深めることができるようにする。これらが、伝統となって研修の成果が積み重なり、

充実していくと考える。

(1) 研究集録や研修冊子の保管

国際理解教育のとらえ方と研修の方針、年間計画、実践の計画と反省・考察・評価等を振り返ることができるようにする。また、活動の様子を写真で記録し、指導案やプリント類と組み合わせて保管しておく。

(2) プリント類、CD等の記録メディアの保管

活動に使用したプリント類、カード類の一切をストックし、誰がどの学年になっても使えるように保管する。また、記録メディアに保存することで資料活用の合理化を図る。



[プリント類の保管]

[授業記録のファイル]



(3) 英語指導案・授業記録の蓄積

A L T 向けの英語指導案については、蓄積があるとそれを参考にできる。また、授業後の反応や気付きなども書き込んでおくとよい。

2 環境の整備と備品の充実

英語活動を円滑に進め、充実した時間を創造するためには、環境の整備や必要な備品を揃えることが重要である。また、活動に応じてたくさん教具をつくり、その所在場所をはっきりさせることにも心がけたい。

(1) ワールドルーム

外国の資料、姉妹校との交流の写真や児童の作品等を展示した部屋をつくり、児童がいつでも気軽に外国の文化にふれることができるようにする。

(2) イングリッシュディと英語のポスター

週に何度か英語の放送を行ったり、英語のポスターを掲示したりして、英語のある環境をつくる。

(3) コミュニケーションルーム

活動に応じて使える自由な場所を用意する。

(4) 備品の充実と活用

英語活動に必要な資料・カード・ビデオ、視聴覚機器等を活用しやすく整理しておく。



[備品の整理]



児童が主体的に生き生きと活動するための研修を心がける

1 A L T、ボランティアティーチャー、外部講師の活用

分からないことは専門家に指導を受けながら、児童と共に学ぶ姿勢が大切である。外部講師からは、目的に合った用具・情報やポイントを押し寄せた指導等を供給してもらうことができる。また、人生経験豊かな人とのふれ合いは、見聞を広め、児童にとっても広い意味での異文化理解となる。

上記の人たちのリスト(名前、連絡先、分野等)を作成し、必要な学年が自由に対応できるようにしておき、必要に応じて保護者や地域からボランティアティーチャーを募集する。

2 情報交換の日常化

研修会や学習会で得たことの復伝を中心に、復伝プリントや口頭による説明を加え、新しい考え方や技法などを学ぶ。雑談の中からもよいアイデアは出るので、日常の会話の中でも積極的に研修にかかわる話題が交わされるようになるとうい。

3 研修に対する自信と誇り

限りある時間で充実した活動にすることは、児童の学習だけでなく、教員の研修も同じである。伝統を積み重ねることや、教員自身が体験を通して身に付いているという実感ができることが、「あの学校に行けばこれができる」「あの学校に行けばこれをしなくてはならない」というような、意識の醸成につながると考える。

教員のニーズに合わせて、柔軟に「変えるところ」「捨てる場所」「買いたいところ」などを整理し、マンネリ化を打破し、レベルアップを図る研修を続けていくことが大切である。